

ブレーマーハーフェン 志賀トニオ氏



ドイツの冬といえば劇場の季節、寒さにより外での活動が制限される時期に劇場を訪れるのが文化として根付いています。というわけで、我々も仕事三昧な毎日を過ごしています。今回は2月1日にプレミエのあったミュージカル"Catch me if you can"のお話をしましょう。

今シーズンは11月にプレミエのあった"My fair lady"に続く2作品目のミュージカル公演となりました。通常、ブレーマーハーフェン歌劇場では1年にミュージカル1公演、オペレッタ1公演、オペラが4公演（数年前までは5公演）のラインナップだったのですが、今シーズンはMy fair ladyがオペレッタの代わりという位置づけで選曲されました。そもそもミュージカルというジャンルはオペレッタから派生したもので、20世紀初頭のオペレッタ作品ではオーケストラにサックス（Sax）が用いられ、あたかもミュージカルのようなサウンドになってきます。この劇場で以前上演したカルマン作曲の"Die Herzogin von Chicago"（シカゴ侯爵夫人）はその良い例です。

ではオペレッタとミュージカルの違いは何かというと、歌手がマイクを使って歌うか否かという点です。ミュージカルの場合、歌手がおでこ、もしくは頬の辺りにマイクを付けて歌います。因みに上記のカルマンやレハール等の20世紀のオペレッタ作品ではオーケストラの音量が大きく、歌手の歌やセリフ部分が聞き取りにくい事が多く指揮者泣かせとなっています。そこで、それらの作品を劇場で上演する時にはお客様に見えないようにマイクをおでこに取り付け、密かに歌手の音量を上げる事がしばしば行われます。My fair ladyは初期のミュージカルでジャズの要素が少なく、音楽の内容としてはオペレッタだけれど歌手がマイクを使う作品と言えるでしょう。

そして今回のCatch me if you canは、2009年初演の熟成したミュージカル作品といえるでしょう。音楽の9割がスイング(swing)が書かれ、ジャズの

要素が色濃くなっています。このような作品をオペラ劇場で上演する時には様々な困難が伴います。

ミュージカルというジャンルはその後大きな発展を遂げ、ミュージカル専門の劇場や歌手が生まれました。こここの劇場では今回この作品の為にミュージカル専門のソロ歌手3人、アンサンブル歌手5人と演出家を招聘しました。これは大胆な試みでありお金も掛かる事であったのですが、稽古の現場では働き方の違いから生じる色々な問題が発生しました。12月中旬の立ち稽古初日、立ち稽古を始める前に音楽稽古をしたのですが、ゲストのアンサンブル歌手達は全く準備ができてなく初見状態だったのです。オペラの現場では立ち稽古の初日には暗譜した状態で参加するのがルールなのですが、ミュージカルの現場では稽古の初日に初めて楽譜を手にして音楽稽古も始めるのが基本だそうです。そこで我々は立ち稽古と並行して音楽稽古もする事に。

そして立ち稽古が始まると次の問題が発生。ドイツの劇場では4時間の稽古の最初の1時間半～2時間の間に一回目の20分休憩を取らなければならない規則があるのですが、今回の演出家がその20分休憩を利用してアンサンブル歌手が音楽稽古をするよう要求してきたのです。彼はさらに4時間の稽古時間を超過して稽古する事を繰り返し、さらには稽古が禁止されている午後の時間にアンサンブル歌手との稽古を始めたのです。ドイツの劇場は大部分が税金で運営されており、我々は公務員として働いているので働く時間等の規則がこと細かに決められています。4時間働いた後には4時間の休憩が入る事が義務付けられているのです。しかしミュージカルの現場は私立で働く側の立場が弱く、規則等も確立していないのです。彼らは朝から晩まで働き通しが普通だそうです。しかし、劇場でのルールは守ってもらわないと困ると思い、上層部の方に直談判に。そこでわかったのは、我々のルールは守らないといけないが、ゲストに関しては契約上一日中働く事が可能である事。そこで折衷案として、午後の稽古は本来禁止されているので、我々劇場関係者抜きのゲストのみでCDを使って稽古する事に。

彼等には気の毒だったのですが、実際とても踊りや舞台転換が多く、稽古時間が足りていなかったので、ある意味演出家の執念を感じ、皆くたくたになりながらも最終的にはオペラ劇場がなしえる上質のミュージカルの舞台に仕上がったと自負しています。

お知らせ： 今回で劇場便りは紙面での発行を終了し、今後はホームページのみでの掲載となります。